毎月第1金曜日掲載

スポニチキャンパス

大阪国際大学陸上競技部

女子走り高跳び　濱津（まつ）　麻愛（ちか）

あの日の私を

高校2年で日本Jr2位も伸び悩み

夜遅くまで練習する美人ジャンパーの濱津麻愛（撮影・神原有沙）下16日から日本ジュニアに向けて笑顔でガッツポーズ

国際交流で社会へ飛び立て―。大阪国際大学短期大学部2年の陸上・女子走り高跳び、濱津麻愛（まちか、19）は9月の日本学生対校選手権に出場した実力派美人ジャンパー。部員66人がボランティア活動など自主性を持って取り組む環境で、高校2年で止まったままの自己ベスト更新にチャレンジ中だ。保育士の夢とともに掲げたバーをクリアする。

人間力と〝考える力〟で自己ベストに挑む

飛び越える

米国の生活に憧れて

マドンナ図鑑

グローバルビジネス学部　森本明日香さん　1年生

はじめまして、グローバルビジネス学部1年生の森本明日香です。私が所属するインテンシブコースは特徴があるコースです。少人数で週の半分が英語の授業。将来、米国で貿易関係の仕事に就きたい私にはピッタリの環境です。

父がビートルズを聞いていた影響からか、小さい頃から洋楽に親しんできました。海外ドラマも大好き。「ゴシップガール」や「グリー」の世界に憧れて、米国での生活を夢見るようになりました。大学ではESSにも入って、勉強を頑張っています。好きな男性のタイプはフィギュアスケートの高橋大輔さん。情熱的なところが素敵。特技はピアノ。近頃はジャズに挑戦しています。

魅惑の学食

○…学内にあるカフェ、ジャルディーノでは本格的なイタリアンが楽しめる。石窯で焼くピザは絶品。一番人気はマルゲリータ（550円、写真）だ。生パスタも学生から熱い支持を受けている。一般にも開放しており、土日祝日以外はこだわりの味を楽しめる。

絶品石窯マルゲリータ

メモ

▽大阪国際大学　1988年（昭63）に開学し、以降はここに帝国女子系の学部を集約。現在は3学部と短期大学がある。学生数は短大を合わせて約2700人。陸上競技部のほかに女子ソフトボール部、女子バレーボール部、女子サッカー部、女子ラクロス部が強い。バレーの強豪・大阪国際滝井は併設高校。

「自分への期待」

翼が折れたジャンパーが再び飛び立とうとしている。女子走り高跳びの濱津は、咲くやこの花高校（大阪）2年の時に日本ジュニアで2位になった実力者。しかし、3年時に左足首のじん帯損傷と交通事故に遭ったことで全く成績が残せなかった。「保育士になりたい」という夢と周囲に励まされたことから大阪国際短大に入学。2年生の今、高校時代に出した自己ベストの1㍍75にあと5㌢に迫るまで力が戻ってきた。

「大学に入って助走を含めて一から作り直しています。今は自分への期待の方が大きいです」

クラブを指導するのが、99年に監督に就任した課外教育センター長の小倉幸雄教授（48、写真）。たった8人の土のグラウンドからスタートし、一時は部員100人を超えるまでに大学の知名度を飛躍的に上げた。全国大会出場選手も多数輩出している。筑波大大学院でコーチングを研究した小倉教授は「人間性アップが競技性アップにつながる」という信念のもと、進んだ技術指導との両輪で社会で通用する選手の育成を目指している。

組織の一員として

最も力を入れるのは組織づくり。合宿のテーマ、方針などは部員で徹底的に話し合いをさせる。これはパワーポイントを使って議論する本格的なものだ。

また、選手は日頃からデータ分析、ホームページ作成といった広報活動など、部の運営に何かしらの形でかかわる。競技1本ではないのだ。自然と、自分の役割、立ち位置を考えて〝仕事〟をするようになる。全体練習は週4日。平日は午後6時から2時間だけという環境で競技力が上がるのは、こうした「考える力」を養っているからだ。記録が低迷した選手が〝小倉再生工場〟で花開いて巣立っていく。

「人生はいわゆるアドリブの世界。考えてさせますが、答えは言いません。時間はかかっても、社会に出た時にはその方がいいですから」

世界で得た経験

今年は部にとって新しい出来事があった。シンガポール国立大と交流し、現地に5日間滞在。合同練習を行った。同学は練習時間が恵まれていないアジア屈指の秀才大学。同じ境遇ながら、多くの種目でシンガポール記録級の自己ベストを持つ大阪国際大の選手が手本となることは多かったようだ。濱津は「基礎を固めることの大切さを伝えました」と、国際交流の成果を口にした。

いざ雪辱舞台へ

濱津の今の目標は16日からの日本ジュニア。大会がある瑞穂競技場は、高校2年で自己ベストを跳んだ舞台だ。故障で挫折を味わったが、大学で様々な経験を積んだ。国際交流や仲間との意思疎通で足場をしっかりと固めてきた。さあ、自分超えの時がやってきた。

地域貢献に注力

○…陸上部は地域貢献にも積極的だ。3年生の近藤佑樹はガンバ担当。サッカー・ガンバ大阪のホームゲームでは他の部員とともに、試合までの待ち時間に観戦に来た子どもの面倒を見ている。「同じ目線に立って話すことが大事だと分かりました」。近藤は小倉教授の勧めで2年時にハンマー投げから走り高跳びに転向。今では2㍍5を飛ぶまでに成長し、3人いる2㍍ジャンパーの一員になった。また、部は4月から短距離の杉本和那美、長距離の布施仁コーチ2人を招聘。指導態勢をよりきめ細やかにしている。

（上）陸上部の集合写真（左）走り高跳び2㍍ジャンパーの（左から）近藤佑樹、滝野大地、中井仁